

広報

平成27年2月27日

# 特 活

第163号

横浜市立小学校特別活動研究会

発行 会長 北村 利郎  
編集 広報委員会

## 「礎（いしずえ）」

横浜市教育委員会 指導企画課  
指導主事 沼田 留美子

私の中学校時代の担任の先生は、大変筆まめな方でした。班ごとに回覧しながらそこはかたく書きつづる班日記には、行ごとに先生からの短いコメントが書かれていました。不思議なことに、コメントが人をつなぎ、自然と仲のよい学級集団になっていきました。また、先生は学級通信も頻繁に出されていました。パソコンもない時代、授業の合間を見て書かれていたであろうB5版の手書きの学級通信を私は楽しみにしていました。

ある日のこと、学級通信の真ん中に「何苦礎」と書かれていました。その時クラスで何が起こってこの見出しになったのかは思い出せませんが、当時この言葉がずっと頭の中に残ったことを覚えています。特に「礎（いしずえ）」という字には、「物事の基礎となる大切なもの」という意味があります。当時15の春を迎える私たちに、先生は「どんなに苦しいことでも、それが自分を支える礎になる。だからくじけずにがんばれ」と伝えたかったのではないかと思います。

さて、今年度もたくさんの教室で授業を拝見させていただきました。子どもたちと先生方が一体になって一生懸命話し合っている姿にはいつも元気付けられます。時には子どもたちが自分の言葉で語り合う、魂が込められたような話し合いに出会うこともあります。このような学級では、互いの意見が真摯に受け止められており、何のために、何に向かって話し合っているか、活動を貫く思いの「礎」がしっかりとしているようです。その一方で、話し合いを支える子ども達による活動の「礎」があいまいな話し合いは、話し方や進め方が上手であっても、言葉のやりとりに終始し、話し合った後の充実感や実践に向けた期待感にはつながらないのではと心配になります。時にはうまくいかない苦しい活動もあると思います。そのような活動の中にこそ、みんなの心の中に何か一石を投じるものがあります。その石を大事にして積み重ねることが、望ましい集団活動に示されているような盤石な集団づくりの「礎」につながっていくのではないのでしょうか。

ところで、中学校時代このような先生のもとで育った私も教職に就き、子どもとの言葉のやりとりを楽しみにする担任となりました。学級は生き物のように日々喜怒哀楽、様々な表情を見せます。苦しいこともたくさんありました。それでも何とか今あるのは、あの日先生が記された「何苦礎」が、私の「礎」になっていたおかげなのかなと、改めて振り返る今日このごろです。

## 夏季研修会

### 特別活動賛歌 いま特活の魅力を語り合おう

~Let Us Now Praise Tokubetukatudou~

8月22日 花咲研究室

今年度の研究テーマ「子どもが育つ学級活動の創造～話し合い活動を通して、よりよい人間関係を築くためには～」に迫るために、研究会役員から「活動の始め方、続け方、つなげる工夫」についての実践提案がありました。

続いて「いま特活の魅力を語り合おう」をテーマに、4人の校長先生によるシンポジウムを行いました。先生方のご経験や歩んでこられた足跡、そして教育の現状をなどもとに、特別活動への熱い思いを語っていただきました。

私たちの、明日の実践への光を照射していただいた思いがします。ありがとうございました。

#### 今、感じる特活の魅力

- ・子どもたちが自らの手で活動を創ることに大きな魅力を感じる。それを教師が共に一緒になって取り組めるところにもまた、特活のよさがある。まさに、教師冥利を感じることができる。
- ・学年当初は、教えることも多いが、活動を積み重ねることで、子どもたち自らが「自主的・実践的に」取り組めるようになる、その成長とそれを感じるとれるところに特活の魅力を感じる。
- ・共に活動をつくると同僚や先輩ともつながることができ、子どもの成長について語り合うことができることは貴重なことである。それが、特活を通して叶うことが素晴らしいことである。

#### 学校で、魅力ある特別活動を実践するために

- ・まず特活部を、元気で魅力あるものになるようにしたい。生き生きした魅力ある学級経営をしている姿を見せられれば、それが若い教師に「空気のように」伝わっていく。教師相互に学び合う、まさに「オン ジョブ トレーニング」が特別活動の創造につながるはずである。
- ・学級活動の時間をしっかり週案に位置付ける。また、特活主任が率先して年間指導計画を作成して、それをまわりに示して欲しい。
- ・校内でよい実践が共有できるような工夫をしたい。例えば、係活動の掲示版を見るとその学級の特活のレベルが分かる。それを一つのモデルにして、さらにより工夫することがよい実践を広げることになる。

#### これからの横浜の特活へのエール

- ・教師が意識を変えていくことが重要である。「決められているから」やるのではなく、「どのように活動をつくったら子どもが生き生きと輝くことができるのか？」を問うことのできる教師でいて欲しい。
- ・年間指導計画で意図的・計画的に活動を位置付けたり、学級活動で育てる資質や能力についてビジョンをもったりすることがもちろん大切なことである。しかし一方で、あまりに分析的・研究的に過ぎると、活動のダイナミックさが失われてしまう危険性もある。本当に子どもがやりたい活動なのか、「子どもの視点にたって」活動や授業をとらえなおす柔軟性を期待したい。
- ・子どもが夢中になって活動している姿やその輝きに、感動できる教師でいて欲しい。
- ・子どもと向き合うことができているのか問い続けたい。子どもは、教師の本気度をはかるリトマス試験紙をもっている。「褒めて」「認めて」「信じて抜いて」、子どもとの信頼の絆を築きたい。

# 授業研究会より

12月3日（水）、市内小学校の3会場で、授業研究会が行われました。

## 【低学年部会】（1年）

活動名：『ダブル スペシャルデー』をみんなでたのしもう」

議題名：『ダブル スペシャルデー』の「おてがみこうかん」でだれにかくのかをきめよう」

### 【授業の様子】

毎月12日を「スペシャルデー」として、集会活動を繰り返し行っている。前回の「スペシャルデー」で、みんなでの手紙交換をした。その際、いくつかの問題が生まれた。そこで、12月の「スペシャルデー」ではその問題の解決のために、「全員が手紙をもらうために、誰に書いたらよいか」について話し合われた。話し合いでは「係の友達のことが一番よく分かるから」という理由で、係の友達に手紙を書くことに決まった。

### 【研究協議・指導講評の概略】

- 子ども同士のかかわりが深いからこそ、係の友達に書きたいという意見に決まった。手紙交換についても、今までに活動経験とその蓄積があったので、自分の経験から考え、判断し意見をまとめることができた。
- 話し合いの柱に出されたものは、どれもみんなが手紙をもらえる方法だった。どういう人からももらえるのか、実際にペアを作ったり、係で集まったりして、誰からももらえるのかを確かめてみてもよかったのではないかな。
- 「スペシャルデー」は、一日を楽しく過ごすためにどこで何をしたらよいか考える活動になっている。このように、学級生活を工夫してよいものにすることが特別活動の役割のひとつである。
- 子どもの思考を整理していくのは教師の役割である。特に板書は、話し合いが終わった時にどのような話し合いになったか、思考の流れが分かるように可視化することが大切である。

## 【中学年部会】（3年）

活動名：「S先生もハニパレ！ ありがとうグッバイパーティーをしよう」

議題名：『ハニパレよりありがとう』の感謝の伝え方を決めよう」

### 【授業の様子】

大学から研修で来ていたS先生が帰ることになった。子どもたちは「突然すぎて、しっかりお礼も言えなかったし、手紙も渡したかった」「もう一度会えないかな」「お別れ会がしたい」という思いをもち、本活動が生まれた。S先生への、お礼の伝え方を決めることを通して、よりよい決定ができるようにみんなで声をかけ合い、3年1組らしく感謝の気持ちを伝えることを活動のねらいとしている。話し合うことは、「一人ずつお礼を言っている時の工夫を決める」「みんなが関わるができる、プレゼントの渡し方を決める」であった。話し合いを通して、S先生へ感謝の気持ちを伝えるという思いはもちろん、友達一人ひとりの考えを認め合い、よりよいものにしていこうとする子どもたちの姿が多く見られた。

### 【研究討議・指導講評の概略】

- 話し合いでの子どもたちの姿から、教師の日々の細かな支援の積み重ねが見られた。学級づくりがしっかりとできている。子どもたちの変容をよく見取り、一人ひとりの成長を認めていることがうかがえる。
- 子どもたちの語彙力が豊富であった。話し合いは、コミュニケーションである。コミュニケーションの基盤とし

て、声の大きさや言葉のキャッチボールを大切にしたい。

○人間関係を深める話合いにするには、子どもが、自分と違う意見をどう生かすことができるかが鍵となる。自分の考えと「同じところはどこか」「似ているところはどこか」「違いはどこか」等に注目できるように指導したい。

## 【高学年部会】（5年）

活動名：「みんなの力で『幻のビッグマグロ』をつくろう！～クラスの団結力を伝える劇をつくろう～」

議題名：「クラスの団結力がもっと伝わるような劇の初めと終わりの部分の内容を決めよう」

### 【授業の様子】

学級の子どもたちは、児童会で行われる「ハッピーフェスティバル」にみんなで出場して、大なわの最高記録を出そうという思いをもっている。クラスみんなが活動を共有できるように、めあてを設定し、共通理解をして、その達成に向けて役割分担をしたり、練習に取り組んだりできるようにしてきた。

子どもたちは「ハッピーフェスティバル」に参加するためのオーディションに出場する中で、「大なわの前後に劇を入れ、さらにクラスの団結力が伝わるようにしたい」という思いをもった。本時は、その劇の中で行うクラスの「コール」をレベルアップさせて、もっと団結力を伝えられるようにしようという話合いであった。「コール」の最中に出すポスターを、どのような動きで見せるとクラスの団結力を表すことができるのかについて考え、実際にその動きをみんなで作ってみたい、問題点を出し合ったりした。学級目標に関するポスターを作成して、それをクラスの全員が持って見せることに決定した。

クラスの団結力とは何かを改めて見つめ直し、「みんなで団結して頑張っていこう」とする気持ちを共有することができた話し合いとなった。

### 【研究協議・指導講評の概略】

- 今話し合っていることは「出し合う・比べ合う・まとめる」のどの段階なのかをはっきりと区切って進めると、もっと子ども一人ひとりの意見が整理できたであろう。
- 発言や態度から、友達の意見を分かろうとする気持ちが表れていた。問題点が多いから活動をやめるのではなく、教師が「どうしたらその問題を解決できるか」と投げかけ、乗り越えていくことができるようにすると、主体性が生まれ、また高学年としての人間関係の深まりが出てくる。
- 「団結力」という言葉は、一見分かりやすい反面、具体性に欠ける面もある。クラスでの「これぞ団結」という経験があれば、それをもとにして切実感のある話合いが期待できる。
- 板書は、話合いの大切なツールである。言語で語られた子どもたちの意見を、見えるようにする機能がある。これにより、意見を整理することができ、子どもたちの思考力を高めることにつながる。また、短冊は動かせることが利点であるから、書いて掲示するだけでなく、短冊を思考の深化に役立てるようにしたい。